

---

# ガンオタ少女のレギオス転生(仮)

(´^`)?

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガンオタ少女のレギオス転生（仮）

### 【Nコード】

N5349Z

### 【作者名】

（´＾＾、）？

### 【あらすじ】

ガノタな少女がレギオス世界へ！！

宇宙とはまるで関係のない世界で少女は何を思うのか！？

結構やりたい放題する予定。

不定期更新ですがストーリーはだいたいできてます。ふつつかものですがどうぞよろしくお願いします。

## 転生（前書き）

注意！

この作品は作者のレギオスとガンダムへの溢れ出た愛でできています。

マジ無理、実写版のひぐらしよりひどいわとか思ったたら回れ右することをおすすめします。

作者はわからないところを妄想で補うことがあります。そういうところはスルーするか感想で指摘していただけると嬉しいですよ。

## 転生

『ソロモンよ！私は帰ってきたあー！』

「少佐あああああー！」

一時間後…。

『勝ったぞおー！！』

「ノリスううううー！！」

ある日の昼過ぎ。一人の女子高生がアニメを見て興奮していた。  
私だった。

ロボットアニメ、特に『機動戦士ガンダム』シリーズにハマったのはいつからだったか。

そう、最初にガンダムを見ようと思ったのは単なる気まぐれ。暇潰しにはなるだろうと思ったのだ。

適当なドラマのDVDと、ついではかりに『機動戦士ガンダム0083 STARDUST MEMORY』を取り、レンタルする。

それが始まり。アナベル・ガトー少佐の格好よさに惹かれ、連邦よりジオンを好んだ。

周りにガノタだと知られたのはゲームセンターでとったサイサリスのキーホルダーを携帯に付けていたのがきっかけ。別に隠すことじゃないので肯定すると、隣の男子は驚きながらも話を振ってきた。

ただ残念だったのは、彼が連邦派だったこと。和やかなガンダムトークはすぐに舌戦に変わった。

『腐った連邦のどこがいいのだ?!』

『ジオンはやりすぎなんだよ!毒ガス攻撃にコロニー落とし、コロニーレーザー!自分たちの住む大地すら兵器にするなんて馬鹿げて

る！』

『腐った連邦からスペースノイドの独立を勝ち取る為には必要だったのだ！ダイクンの掲げた理想はスペースノイドの希望だった！連邦の武力による支配から脱し、宇宙移民者たちに独立国という一つのモデルケースを示すための！』

『それはザビ家の独裁のためだろう！！』

『確かに公国はデギンの野望から生まれた！しかしその意志は決して利己的なものではなかった！』

…とまあ、かなり白熱した議論が続き、それ以来、彼とはよく話すようになった。

ガンプラも彼に勧められて始めた。最初に作ったのはHGUCのザク？で、初めてながらよくできたと思った。

しかし彼にドヤ顔で見せられたHGUCの陸戦型ガンダムのクオリティにとてつもない敗北感を覚え、己のスキルアップを重ねた。

その後約二ヶ月を費やし製作した私のズゴックEに彼は膝を折った。

彼との腐れ縁はその後も続き、ガノタ夫婦と周りから呼ばれている事には気がつかなかった。

「…ふう。あー、おもしろかった。」

DVDを取り出し、ケースに納める。次は何を見ようか。

あ、そうだ。

「次は逆シャアを借りてこよう。」

そつつぶやくと楽な格好で家を出る。

近くのTSU AYAまで歩いて十五分。おしゃれするのはめんどくさい。

SUTAYAに向かってしていると県道に出た。ここを右に曲がって道を渡ればTSUTA Aだ。

「  
「

嵐の中で輝いての鼻歌を歌いながらTSU AYAに向かって歩いていると、前の方に小学生が見えた。赤いランドセルだから女の子かな？でも最近のランドセルはかなりカラフルだからもしかしたら…。

などと考えながら眺める。どうやら小学生は道を渡りたいようだ。

「危ないなあ。」

ここは県道でそれなりに交通量がある。渋滞にはめったにならないが。もちろん今日も渋滞ではなく、車は元気よく走っている。

当り前だが歩道橋はちゃんとある。小学生より向こう、二百メートルほど先に見える。

たぶん向こうまで行くのが面倒なんだろう。

危ないよ。

その声を掛けようとした瞬間、小学生が飛び出した。

「ッ！！」

小学生の向こうから軽トラックが来ている。

注意しつつガードレールを飛び越え、小学生へ全力疾走。

追いつくなり首根っこを掴み引つ張る。

目の前を軽トラックが駆け抜けていく。

だがまだ安心できない。

駆け抜けた軽トラックの方に目を向けると別の車が突っ込んで来て



いた。

…ッ、だめ、よけない。

なら！

「南無三！」

小学生を抱き上げながら突っ込んでくる車のボンネットに飛び乗るように跳躍。

もちろんアニメじゃないので車の上を転がるようになる。

小学生をしっかり抱きしめ、転がる。ものすごく痛い。

車の上を転がったのは一瞬だった。すぐに投げだされて、地面に叩きつけられる。なんとか身をひねり、背中から落ちる。小学生に大きな怪我はない。

向こうでは軽トラが止まり、反対側でもさっきの車が止まって人が出てきた。

騒ぎになってきたが動けない。

当たり前だろう。受け身もせず背中から落ち、頭も守ってなかったのだ。

だんだんと意識がぼやけてくる。周りの音が聞こえなくなり、視界も暗くなってきた。

死ぬのかな…。

死ぬんだろうなあ…。

小学生は大丈夫だったかな…。

大丈夫だといいなあ…。

あ、そういえば…

「……まだ……」

ノイエ・ジール作りかけなのに…。

そして私は死んだ。

## 転生

気が付くと真っ白な空間。

上下左右、見渡す限り白、白、白、白、白。

ここは？

《お前は大罪を犯した》

だれ？

《世界の運命を変えた 変えてしまった》

どういふこと？

《其れは許されざること》

なに？

《だから転生させる》

意味がわからない。

《これから幾つもの世界、幾つもの次元で数多の苦行を課す》  
地獄行きってこと？

《見事耐えきってみせたならばもとの輪廻に戻してやる》  
《ま、まっつて

《せいぜい励め

愛しい娘よ

》

私の意識は途絶えた。

それから私は気が付くと私は別の私になっていた。これは二重人格とかではなく、死んだ『私』とは別の個体の『私』になっていたという事。

あの時の《声》は神様か何かなのだろうか？

あの時、《声》は苦行を課すと言っていた。

きっと私はこれから経験した事のない苦しみと向き合うことになる。

それが肉体的な苦しみか、精神的な苦しみかはわからないけど、知ったことが。

私はあの時小学生を助けた事に反省も後悔もしていない。

この身を焼かれて死のうと、全身を切り刻まれようと、何をされても最後は笑って死んでやる。

あの《声》の主が驚くほど、いさぎよく生きて、死んでやる。

この箱庭

自律型<sup>レギオス</sup>移動都市

の中で。

## 第1話

私は鋼殻のレギオスの世界に生まれたいらしい。

正直レギオスは途中までしか知らない。

私が生まれた都市は仙鷲都市シュナイバル。都市の意志であり、核である電子精霊の生まれる場所。原作キャラのニーナの故郷でもあったはず。

まだ会ったことないけど。

そこに私は武芸者として生を受けた。家は中堅クラスで父も武芸者。母は私を産んでから体調を崩してしまっただけらしい。

私の新しい名前はティア。ティア・ホークアイだ。

どこの狙撃手とかアランカルとか考えたら負けだとおもっ。

だって金髪じゃないし。黒髪だし。ショートカットだけどね。

ちなみに今年で七歳になった。一度とった歳をまたとるとは思わなかった。

で、今は父の鍛練を見ているところ。この都市は汚染獣の襲撃はあまりないが電子精霊を盗みだそうとするゴミカスクソ野郎共が後を断たないため、対汚染獣より対人戦を重視している。

父は対人戦の鍛練をしているが聞いた話だと他の武芸者達と何日かに一度、合同で対汚染獣戦の訓練をするらしい。

対人戦もたまに他の武芸者達を家に呼んで作戦会議や連携の訓練をしている。

父が一通りの技の確認を終えたらしい。ちょうどいいので気になっていたことを聞いてみる事にする。

「父さん。」

「うん？なんだ、ティア。」

「いつになったら私に技を教えてくれるの？」



そう、私は剣は使えるのだ。活剣はもちろん、衝剣も少しなら使える。

これはこの都市でもなかなか凄いほうで父も自慢気だった。

「技？まだ早くないか？」

「早くないよ！」

「だがアーサー君だってまだ訓練してないんだぞ？早いよ。」

アーサーというのは近所に住む私より二歳年上の少年だ。はつきり言って怠け者。家柄がいいせいかよろしくない性格だ。

「でも都市の外には汚染獣がいるんでしょ？襲ってきたらどうするの？」

「その時は父さん達が頑張るよ。だからお前は母さんを助けてあげていればいい。わかったな。」

「…わかった。」

…わけねーだろ。死にたくないし長生きしたいけど世界は見て回りたいのだよ！

何があってもなんとしてでも生き残ってやる。できるだけ長生きしてあの《声》の主を驚かせなければ。

技がだめならせめて良い錬金鋼を用意したいなあ、等と考えながら私は家をでて近くの屋根に跳びのった。

錬金鋼だが自衛用にと防犯ベルのノリで貰った。昔父が使ってた物で、復元すると三十センチ（持ち手込）くらいのサバイバルナイフの形になる。

六歳の娘の誕生日にナイフあげる父とか…。素敵やん。

周り苦笑してたけど私は大喜び。「これからも鍛練がんばります！」  
といい子アピールで父感動。

人差し指を立て、風を感じる。正確に言えば風の中に混じった剄を  
だが。

指先を通る風の中に空気とは別の感覚。さつき鍛練していた父から  
感じたのと似ている。剄だ。

剄が流れてくる風上に向かい跳ぶ。肉体に内力系活剄を流し強化。  
タン！と軽い音を残し宙を跳ぶ。こうして内力系活剄を使っている  
のも訓練だが、今流れてきた剄を追っているのも訓練。

空気中の剄を感じ、内力系活剄を使う。しかし追跡する剄を自らの  
剄で見失わないように。

そしてあわよくば剄を流している武芸者の訓練から見取り稽古をす  
る。

シュタタンツと屋根、壁を使った三次元的な機動で角を曲がり、目  
的地へ。

トッ、とできるだけ音を立てずに着地。

剽はなかなか大きな屋敷の中から出てきていた。

覚えてたの殺剽を使い、屋敷の周りを囲んでいる鉄格子のなかを物色するように見て回る。

殺剽してなきや変質者ね。

ちなみに殺剽だが、自分のまわりを剽で覆う感じで、なおかつ周りに剽が漏れないように循環させるイメージでやったらできた。

っつ。

見つけた。剽の主だ。

…ん？あれって、髪長いけどニーナ・アントーク？

どうやら一人で鍛練してるらしい。

双鉄鞭を使い、まだぎこちない動きで技を放つ。

だけど少し雑…かな？

手を抜いてるっていうか、どちらかと言うと考え事をして集中しきれていないような…そんな感じだ。

うーん、何かあったのかな？

えーい面倒だ…って何でニーナさんはこっち見てんの？

…あ、考えてたから殺戮が解けてた。

…ええい、ままよ！頑張れ私！

大事なのは第一印象！

「…何を悩んでいるの？」

失敗したああああ！？

## 第2話

「何を悩んでいるの？」

「ばかあああ！私のばかあああ！外からのぞきしてる変質者にそんなこと聞かれたらどうなるか分かれよ！」

「…あなたは？」

「ん？ずいぶんおとなしいな…？原作とキャラちがくない？あ、小さいからか。」

「ファイア。ファイア・ホークアイ。」

「…ホークアイ？」

「ファイアでいいよ？」

「…あなたはホークアイ家の？」

「あ、家のことを聞いてたのね？はずかしー。」

「…そうだけど、知ってるの？」

「父様と話してた。」

「…そっか。ところであなたは」

「ニーナだ。」

「ニーナ？」

「私の名前だ。ニーナ・アントーク。」

「…じゃあ、ニーナは何をしてたの？」

「訓練だ。」

「…さつきも聞いたけど悩み事でもあるの？」

「…何でだ？」

「何ていうか…集中できてなかったから。」

「…そんなことは、…」

あ、黙っちゃった。

「えと、よかつたら聞くよ？」

「え？」

「悩み事。愚痴でもいいけど。」

「何でだ？」

「さあ？」

「さあって…。」

どうしたら信頼してくれるかな…。

あ、そだ。

「…じゃあ、友達になろうよ！」

「友達？」

「そう。お話したり、一緒に遊んだり。」

「…だが私には訓練が…。」

「じゃあ、一緒にやろう！」

「え？」

今私とニーナは鉄格子を挟んで大体二十メートルくらい離れてる。

え？声が届くのかって？活剷で強化してるから無問題。

内力系活剷で肉体強化。十メートル程の鉄格子を飛び越え、ニーナへ。



不法侵入？聞こえんなあ。

「ファイアちゃんは武芸者だったのか。」

「うん。錬金鋼もあるよ！」

そういうと腰の後ろの剣帯から錬金鋼を抜き、レストレーションと小さく呟く。

錬金鋼はパチツと一瞬光るとナイフになった。

「すごいな。だが大丈夫なのか？」

「少なくとも集中できてないニーナちゃんよりは強いもん。」

「言ったな？」

「言ったよ。」

「では…」

錬金鋼を右手で逆手に持ち、左半身を前に。腰は低めに、重心はどちらにでもすぐに移せるように真ん中。

「行くぞ！」

そういつとニーナちゃんは鉄鞭を構え突っ込んでくる。

横風には振られた左の鉄鞭をかがんで避けると、右の鉄鞭をナイフで止め、左の肘でニーナちゃんの鳩尾に肘鉄を食らわせる。

だけどニーナちゃんがそう簡単に倒れるわけがない。現に今だって肘鉄を食らう直前に一步下がって衝撃を殺していた。

ニーナちゃんは右の鉄鞭を前に構えると、フェンシングの突きのように突いてきた。狙いは私の肩。

ヒュツと音を鳴らしながらニーナちゃんの鉄鞭が顔の横を抜ける。

躲されると予想できていたのだろう。ニーナちゃんは体勢を崩さず鉄鞭を引く。引くとすぐに一步踏み出し、三連突き。肩、腹、手を狙っている。

それをナイフで軌道を逸らし、こちらも一步踏み出す。

こっちの武器はニーナちゃんの鉄鞭に比べてレンジが狭いのだ。離されたら近づくのには苦労しそうだ。

近づかれるとは思ってなかったのか動きに隙ができる。いける。

そう思い、攻撃しようとして、息を呑む。

逆手に持っていたナイフをクルリと回して普通に持つ。

突きを放っていた鉄鞭とは逆の、左の鉄鞭がこちらを風ぎ払うかのようには振るわれる。

わざと隙をみせて誘っていた。迂闊。

その鉄鞭に叩きつけるようにナイフを振るい、そこを支点にして、まるで宙返りするように鉄鞭を回避。

空中にいる私を狙い、ニーナちゃんが右の鉄鞭を振り上げる。

その鉄鞭を蹴り距離をとる。否、とらされた。

やべえ、ニーナちゃん強いっす。

「なかなかやるな」

「…びつくりした。」

なんか強くない？

「あれを避けられるとは思わなかったよ。」

あれで教官を倒したんだぞ、とニーナちゃんは苦笑する。

「危なかったよ。」

「追撃も避けてみせたくせによく言っな。」

二人とも息を整え、構える。

「次は絶対一撃いれてやる。」

「できるかな？」

「やる。」

やる。を言いながら動く。

姿勢を低く、地面を滑るように駆ける。

それをニーナちゃんは体の前に鉄鞭を交差させ、待つ。

一瞬で距離を詰め、ナイフを振り上げる。

ガキッツとナイフと鉄鞭の間で火花が散る。

今。

そう考えると、散った火花に気をとられたニーナちゃんから距離をとる。

殺到。

自分の気配を消し、回り込む。

向かうのはニーナちゃんの左側。

突然消えた私に驚きながらもニーナちゃんは構える。

隙はもちろん、死角が減った。

防御の構え？流石はアントーク家といったところかな。

残った死角もニーナちゃんが警戒してるからたぶん気付かれる。

ここまでとは思わなかった。

だけでもまあ、殺到も近接格闘戦に持ち込めれば上出来だと考えていたので構うまい。

ニーナちゃんの左斜め後ろ。

ナイフを逆手に、姿勢は低く。

ニーナちゃんに近づく。まだ大丈夫。まだ、まだ、まだ、

…気づかれた。

そうわかると殺戮を解き、斬り掛かる。

切り払い、突き、振り下ろし、振り上げる。

ニーナちゃんはすべて双鉄鞭で受ける。

ギガガキイツと金属の悲鳴を聞きながら腰を落とし、足払いをする。

ニーナちゃんは攻撃を受けることを考えていたらしく、体勢を崩す。

よろけたニーナちゃんに抱きつくように飛び掛かり、馬乗りになる。

ニーナちゃんの大鉄鞭が動く前に、首筋にナイフを当てる。

「勝った。」

「…参った。」

ニーナちゃんはそう言うのと体から力を抜いた。

私もニーナちゃんの上からどきながら活剱を解く。

「ファイアちゃんは殺剱が使えるのか。」

「うん。」

「すごいな。ホークアイさんに教えて貰ったのか？」

「うん。自分で。父さんのを見て覚えたの。」

「なっ、自力で殺剱を!？」

「ニーナちゃんはできないの?」

「…ああ、どうしても気配が漏れてしまうんだ。」

そう言うとニーナちゃんは殺剱をした。気配は消えてはいるが中途半端なため、違和感を覚えた。

私の考えていることは分かっているのだろう。

苦笑しながらどうすればいいか聞いてきた。教官の話はよくわからないらしい。

「えとね、ニーナちゃんは気配を消そうとしてるっていうか、完璧に殺そうとしてると思う。」

「だが殺到はそういう技だろうか？」

「そうだけど、最初っから完璧にできたら苦労しないよ。」

「じゃあどうすればいいんだ？」

「えーとね、気配を殺す、消すんじゃないかって薄くするイメージでやるの。」

「薄くするっ？」

「うん。こっ、到で体のまわりを包んで、到に流れを作るの。」

「包む。」

「そうそう、で、到が漏れないように。」

「こっ、か？」

「体に纏わせるようにやるのは難しいよ。もっと余裕を持たせてみたらっ？」

「むっ、こっ？」

「あ、いい感じだよ。まだちょっと甘いけど、練習すればよくなるよー」



「そうか？」

「む、嘘だと思うなら誰かに見てもらいなよ。」

「そうするよ。」

「二ナちゃんはそういうと殺戮を解き、座った。」

私も横に座って、言う。

「気分転換になった？」

「ん、…そうだな。」

「よかった。」

「…聞かないんだな。」

「初めて会ったのに話してもらえるなんて思っていないよ。」

「…そうか。」

「そろそろ帰るね。」

「もう帰るのか。」

「うん、…ねえ？」

「なんだ？」

「また来ていい？」

「ああ、もちろんだ！それと、」

「なに？」

「次は訓練だけじゃなくて、い、一緒に遊ぼう！」

「うん！またね！」

「ああ、またな！」

そして私は活剽を使い鉄格子を飛び越え、ニーナちゃんに手を振って、屋根を走って帰った。

今日は新しい友達ができた。また少しだけあの《声》の主の予想から外れられただろうか？

そんなことを考えながら、私は家に帰っていった。

## 第2話（後書き）

殺到については作者の独自解釈です。信じちゃ駄目です。

結局書きませんでした。ニーナは悩んでいたのではなく落ち込んでいました。オール・オブ・レギオスによるとだいたいこの辺りでニーナは母を亡くしてるっぽいので。

感想、意見は随時募集中！お手柔らかにお願いします。

### 第3話（前書き）

はやくツエルニに行きたいなあ…。

### 第3話

二ーナちゃんと友達になってから一週間が過ぎた。

この一週間で二ーナちゃんとはかなり仲良くなったと思う。

一緒に訓練して、一緒に屋根の上を駆け、電子精霊の子供達がいる宿り木を見に行った。

蛍よりも明るい光がふわふわと飛んでいる光景はなかなか綺麗だと思っただ。

そして今日。

今日はなぜか父さんに呼ばれた。用事があるなら直接言うのに今日はなぜか書斎に呼ばれたのだ。

ノックをして扉を開ける。

「父さん、入るよ?」

「ああ、わかった。入りなさい。」

部屋に入って用事を聞く。

「それで今日はどうしたの？わざわざ呼びだして。」

「そのことなんだがな、フィア。お前、ニーナ・アントークさんと仲が良いらしいな？」

「？うん、友達だよ。」

何でそれを知ってるんだろう？

「たまに一緒に訓練してるな？」

「してるけど…それがどうかしたの？」

「うん、実はなアントーク家からお前に『うちで武芸やらないか』と勧誘がきている。」

アントーク家はシュナイバルでも有数の武芸一族だ。もちろんそこで武芸の腕を磨きたいという武芸者はたくさんいる。

そんなアントーク家からの勧誘。

「それ、本当？」

「ああ、私も自分の目を疑ったよ。…で、どうする？」

そんなの…

「行くに決まってるよー！」

父はクスリと笑うと、よし。と呟き、言った。

「わかった。フィア。きつとお前はこれからかなり妬まれ、僻まれるだろう。だが絶対に立ち止まるな。自分の目的だけを見る。いいな？」

「うん、わかったよ。父さん。」

そして私はアントーク家で武芸をすることになった。

次の日まで待ちきれなかった私はアントーク家に挨拶に行く父について行くことにした。あわよくばニーナちゃんと遊びたいという下心を持って。

アントーク家につくと中では武芸者達が訓練をしていた。

試合形式でやっているらしく、父と私は終わるまで待つことにした。

どうせなら、とその試合を見る。

試合をしている武者二人は弱くはないが強くもない、良くも悪くも普通だった。

実力が大して変わらない者同士の試合というのは変わり映えしないため退屈だ。

本人達は真剣だろうが、正直言って型にはまりすぎている。

しかし見てないわけではない。

この試合から自分のイメージする戦闘スタイルに使えそうな技がなにか、また、この二人の悪いところを探し、見極め、自分に活かさなければならぬ。

…二人は右に左にと動いているので一人をA、もう一人をBとして見る。

Aは長めの直剣を使っている。Bはトンファーだ。

直剣は剣自体の重さで相手を叩き斬る、というより衝撃を与える武器だ。剣というより打撃武器。分類するなら対汚染獣武器だ。

トンファーは完全な打撃武器だが、これは一撃を軽くする代わりに連続攻撃できる。突いてよし、叩いてよしのなかなか優秀な武器。ただ一つ欠点があるとすれば、扱いづらさだろうか。こちらは対人



武器として使われることが多い。

もちろんこの世界には剄というものがある。直剣を使う者のなかにはBの数倍の速さで連撃できる者がいるし、トンファーを使う者のなかには一撃でAを吹き飛ばすことができる者もいる。

結果を決めるのは武器ではなく実力なのだ。

話がずれた。

AとBのどちらが優勢かと聞かれると、どっちつかずだ。Aは相手に一撃いれることしか考えてないし、BはAの一撃を警戒して思い切った行動がとれずにいる。

客観的に見れば二人は隙だらけだ。

あ、また隙ができた。次は右肩。Bが攻勢にでた。ということは脚に大きな隙ができるはず。…やっぱり。あ、また。脇、腕、頭、腹、肩、また腕。

あれでアントーク家の武芸者？私でももう少し上手くやれる気がする。

その後しばらくしてから焦ったのが大振りになったAをBが倒し試合は終わった。

その後、私は父についていき、アントーク家の当主に挨拶をした。

アントーク家の当主は厳格そうな人で、いかにも武芸者という感じだ。…こんな人がなんで私をここに誘ったんだろ？謎だ。

父の挨拶のあと私も挨拶をする。

「ファイア・ホークアイです。これからよろしくお願いします。」

「ああ、よろしく。君はなかなか優秀な武芸者のようだからな。厳しくいくぞ。」

「はい、お願いします。」

…どこで私を優秀な武芸者だと判断したんだろ。父がアントークさんに普段の私の訓練内容を伝えている間、そんなことを考えていた。

うーん。まだかなあ。

私のための話し合いだと分かっているけど退屈。

……………。

…あ、ニーナちゃんだ。

「アントークさん。」

「ではまず戦闘スタイルの構築が必要だと、…ん？何かね？」

「私も訓練に混じってきてもいいでしょうか。」

「ん、ああ、構わないよ。」

「ありがとうございます。」

そう言うとはその場を離れ、ニーナちゃんのところに向かう。

「ニーナちゃん。」

「え？ファイア？なんでここに？」

「私もここの門下生になるの。」

「すごいな。いつの間に試験を受けたんだ？」

「試験なんて受けてないよ？」

そんなのあったんだ。

「え？じゃあ誰の推薦なの？」

「推薦でもないよ。勧誘。」

「勧誘って…誰の？」

「ニーナちゃんのお父さん。」

「父の！？」

「わっ！ど、どうしたの？」

「い、いや、すまない。まさか父が勧誘するとは思わなくてな。」

「珍しいの？」

「私の知るかぎり初めてだな。」

「へー。ま、いいや。それよりニーナちゃん！一緒に訓練しよう！」

「へーって…。まあ、やるけど。」

「じゃあ、うーん、あつ。あっち空いてるよ！行こう！」

「わかった。」

私たちは比較的人の少ない隅にくる。私が錬金鋼を取り出すのを見てニーナちゃんが言う。

「ファイアの武器はナイフのままか？」

「？ どういうこと？」

「いや、前から思っていたがナイフはファイアの戦闘スタイルとあっていないんじゃないか？」

「あー、まあ、今までは護身用って感じだったからね。変えたいと思っよ。」

「そうか、じゃあちょっとついてきてくれ。」

「いいけど…？」

そういつて移動をするニーナちゃんについていく。

「この中から自分にあった武器を選んでみてくれ。」

ニーナちゃんが示したのは様々な種類の模擬戦用武器だった。

「わかった。それにしても色々あるねえ。」

剣だけでも三十種類はある。

「まあ、たくさん人がくるからな。」

話しながらも武器を探す。

ん？盾もあるんだ。

…これは…ガンダムシールド？似ているだけかな？どのみち重いしジークジオンな私が見つわけがない。

…！こ、これは！ゲルググのナギナタ！？つ、使いたいけど…私には合わないよ…。

泣く泣く断念。

その後もズゴックを思わせる手甲や、ザクマシンガン等を苦悩しながらも断念し、武器を決めた。

「ニーナちゃん、決まったよ。」

「ん、もう決まったのか？まだ時間はあるからゆっくりでもいいぞ？」

「ううん、だいたいイメージはあったからいいよ。」

「そうか？ファイアの武器は盾と剣と…鎖？」

「うん、そつだよ。」

今の私の武装はというと、右手に片刃の剣を持ち、左手に盾、さら

に右腕に鎖をぐるぐる巻きにしている。

ふふふ、わかる人はもうわかるよね？

そう、この装備、グフなのだよ！

ランバ・ラル、ノリス・パツカードなど多くの武人達が乗り、散っていったMSと同じ武装…テンションあがるのは仕方ないよね！

若干(?)テンションが上がった私をニーナちゃんは不思議そうに見ながらも何も言わなかった。

「じゃあさっきのところでやるっか。」

「あ、ああ、そうしよう。」

そういつて私とニーナちゃんはさっきの隅っこのスペースに戻る。

「やる前に言っておくが、今は人が多いから剽技は使っちゃ駄目だ。」

「ん、わかった。」

私の返事を聞くとニーナちゃんは錬金鋼を復元する。

「それじゃあ、はじめぞ。」

その言葉を合図に、私とニーナちゃんの試合が始まった。



### 第3話（後書き）

ちなみにフィアはレイフォンと同年。突っ込みはなしで。

あとは、トンファーや直剣、アントーク家云々は妄想。

## 第4話

ニーナちゃんの言葉で私とニーナちゃんは同時に構えた。

ニーナちゃんが構える。

右手の鉄鞭を前に、左手の鉄鞭は後ろ。体は自然体。

私の構えは、左の盾を前に、右手の剣は後ろ。鎖は少し緩めに、盾は攻撃を受けるのではなく流す為に斜めに構える。

ニーナちゃんの間隙を探す。

どうやらニーナちゃんはおくまでこちらの攻撃を待つ構えのようだ。

じゃあ先手は貰おうかな。

盾は前にしたままニーナちゃんに向け走る。

ニーナちゃんの間合いに入った瞬間、ニーナちゃんの鉄鞭が振られた。

横風ぎに振られたそれを、盾で跳ね上げる。

「ッ!？」

がら空きになつた脇腹めがけて剣を振る。

ニーナちゃんはもう一方の鉄鞭で剣を防ぐが弾かれ、距離をとられる。

今までニーナちゃんとはナイフで訓練をしてきた。

だから私の剣の重さと遠心力を最大限に活かした攻撃にまだ対応仕切れていないのだろう。

だがおそらくすぐに適応してくる。チャンスは今。

再び構える。

ニーナちゃんは今度は警戒しているのか鉄鞭を体の前で交差させて私を待つ。防御の構えだ。

なら。

盾を構え、そのまま突っ込む。

剣を持つ手に力を入れる。

ニーナちゃんが剣を受けとめるために力をためる。

そしてそのまま体当たりをしてニーナちゃんの構えを崩した。

剣の斬撃を警戒していたニーナちゃんは見事に体当たりの衝撃を受け、隙だらけになった。

ここで一気に攻勢にでる。

剣を振り払い、振り下ろし、突く。ニーナちゃんは鉄鞭で受けとめながら後ろに飛び、距離をとろうとしている。

だけど残念。

そこはまだ私の間合いだ。

ニーナちゃんにむけ剣を投げつける。

回転しながら飛んでいく剣は着地したばかりのニーナちゃんに襲いかかった。

慌ててニーナちゃんは鉄鞭で剣を弾く。剣は上に跳ね上がり、ニーナちゃんの後ろに転がった。

だがまだ終わっていない。

ニーナちゃんの意識が剣に向かっていている間に右手の鎖を解く。

そしてニーナちゃんの意識がこちらに向く前に鎖を振るう。

気付いたニーナちゃんはなんとか避けようとするが遅い。

鎖は見事にニーナちゃんの体に巻き付き、動きを拘束した。

できればここでグフみたいに電撃を流したいところだが、今は剽技は禁止だ。

なのでおもいつきり鎖を引っ張る。

「うあっ…！」

ニーナちゃんは小さく声をあげ、独楽のように回る。

鎖が解けるとニーナちゃんはたたらを踏みながらも止まった。

私はニーナちゃんが止まるまでに鎖を右腕に巻き付け簡易式の手甲にする。

普通の手甲に比べると天と地並みの差があるだろうがないよりはあった方が良く決まっている。

どうやらニーナちゃんは体勢を整えたらしい。

双鞭を構えてこちらの動きを伺っている。

うーん、後でニーナちゃんに教えてあげなきゃ。

『攻撃は最大の防御だよ』って。

仕掛ける。

ニーナちゃんの攻撃を盾で受け流し、懐に飛び込む。こうなるとニーナちゃんは双鞭のうちどちらかを手放さなくてはいけなくなる。近すぎて鉄鞭の威力を発揮できないのだ。

ニーナちゃんは一瞬、鉄鞭を手放す事を躊躇う。仕方のないことだ。戦いの中で武器をなくすのは死を意味する。

もちろん武器がなくても素手で戦う化け物は例外。

しかし目の前に攻撃が迫っていて、避けるためには武器を手放さなくてはならない時は迷わず捨てるべきだ。

鎖を巻いた右腕がニーナちゃんの鳩尾にたたき込まれる。

…ぬるぽ！

「がつ…！」

ニーナちゃんは小さく悲鳴をあげ後ずさる。

その隙に転がっていた剣を拾う。

んー、ニーナちゃんはそろそろ限界かな？

終わらせてあげよ。

剣を構えてニーナちゃんに迫る。

「くっ…！」

ニーナちゃんは鉄鞭を振るうが、さっきと比べて威力が弱い。

パンチが効いたらしい。

連続攻撃。

鬼畜とか言われても不思議じゃない位に攻撃を加える。

途中、ニーナちゃんの鉄鞭の一本が宙を舞う。

ニーナちゃんは一本になった鉄鞭を両手で持ち、攻撃を防ぐ。

だが私の攻撃を受けるたびに徐々に後退。

少しよろけたところを見逃さず、シールドタックル。

尻餅をついたニーナちゃんに剣を突き付けると、ニーナちゃんは言った。

「参った。」

悔しさの見え隠れするその言葉を聞いてから私は言った。

「うん、勝った。」

その後は二人で反省会である。

他人の意見を聞くというのは大切なことだ。

「ニーナちゃんもっと攻めるべきだよ。その方がニーナちゃんにも、ニーナちゃんの武器にもあっていると思う。」



「そうか？相手を誘い込んで一気に叩いた方が手っ取り早いと思うんだが…。」

「それで押し込まれてたら意味ないじゃない。」

「うっ…。」

はあ、と私はため息を吐くとニーナちゃんに言った。

「この都市にはニーナちゃんより力の強い武者はたくさんいるし、汚染獣が相手になったらきつとニーナちゃんじゃ話にならないよ？」それに、と付け加える。

「武者者の負けは都市の死だよ。『守る』なんて考えでいたら絶対に勝てない。」

「都市の、死…。」

「そう。相手が人であろうと、汚染獣であろうと、その先にあるのは都市の滅びだけ。」

そう言うとニーナちゃんは少し俯いてしまった。ああ、もう！

「だから！」

少しだけ大きな声で、ニーナちゃんを見据えて、言う。

「落ち込んで暇なんて武者にはないの。そんな事をしていくらいだったら素振りした方が何万倍もマシ。」

「本当に都市を守りたいなら刺し違えるくらいでいかなきゃ駄目だよ。攻撃は最大の防御なんだから。」

「…わかった。これからは気をつける。攻撃は最大の防御だな。」

おお、なんか強い目になった。ニーナちゃんやっぱイケメンだなあ。

「その調子だよ。じゃ、続きやろっか。」

「ああ、そうしよう。あ、そうだファイア？」

「？なに？」

「さっき戦っているときに思ったんだが、武器を使うことを意識し過ぎじゃないか？」

「というと？」

「いや、今までナイフ使っていた時と違って蹴りとか使ってたからな。」

「あー、確かにそうかも。次から気をつけるね。」

「じゃあ続きを始めようか。」

「わかった。」

「今度は勝つ。」

「負けないよ。」

お互いに構え、動こうとした瞬間、ニーナちゃんのお父さん、アン  
トークさんの声が響いた。

「止め！」

全体に放たれた声は訓練中だった武者達にも聞こえたらしく、み  
んな動きを止める。

「今日はこれまで！一週間後にジルドレイド様が来る事が決まった  
！各自準備しておけ！」

そうアントークさんが言うと、そこにいた武者達は返事をしてか  
ら移動を始めた。昼食だろう。

「ジルドレイド様って？」

「知らないのか？」

「うん。」

「…そうか。大祖父さまは私の尊敬する武者者でな、昔からこの都  
市を守るため人工冬眠をしてるんだ。」

「会ったことがあるの?」

「ああ、前に一度だけ。大祖父さまが定期検診で人工冬眠を解いた時にな。」

「ふーん…。」

「父は大祖父さまをこの都市の守護神だっって言っていた。」

「人なの?」

「大祖父さまはたぶん人だけど、ものすごく強いんだ。」

「へえ、そうなんだ。」

その後も、ニーナちゃんと話して思ったが正直、凄く胡散臭い。

人間なのに守護神を語ってることもあるが、本当に強いのか、人工冬眠をして体が持つのか、怪しいことだらけである。

まあ、いい。

それなら会った時に化けの皮を剥いでやるだけだ。

そんなことを考えているとアントークさんが私に話しかけてきた。

「やあファイア君。さっきの模擬戦見ていたよ。初めて使う武器の割

になかなか上手かったな。」

「ありがとうございます。あと私のことは呼び捨てで結構です。これから師事する人に敬語で話されるのは何か変ですので。」

「うん？明日正式に入ってからにするつもりだったが…。まあ、そういつならそうしよう。」

「ありがとうございます。」

「ところで、ちょっとついてきてくれ。君の錬金鋼を作る。」

「あ、はい。じゃあまたね、ニーナちゃん。」

「ああ、また明日。」

「うん、また明日。」

そういつて、私は歩いていくアントークさんを追いかける。

「錬金鋼って、どこで作るんですか？」

「ん？ああ、家の錬金鋼はほとんどサットンのところで作っている。」

「サットンって、あの錬金鋼技師で有名なサットン家ですか？」

「ああ、そうだ。」

サットン家といえは原作キャラのハーレイ・サットンの実家だが、シュナイバルでは優れた錬金鋼技師を多く輩出する名門だ。

「ファイアの武器はさっきので決定ということでもいいのか？」

「はい。大丈夫だと思います。」

「そうか。ほらここだ。」

そういつて、アントークさんは近くにあった店に入っていった。

私もそれに続く。

入るとアントークさんは受付らしき人と話を始めた。

しばらくしてアントークさんと話を終えた受付の人が私に言う。

「あなたがファイアさんですか？」

「はい。」

「ではこちらへどうぞ。」

わかりました、と返すと、アントークさんが言った。

「私は此処で手続きをしておく。終わったら先に帰って構わん。」

「わかりました。」

そういつて、私は受付の人に連れられて建物の奥に入っていった。

どんな錬金鋼になるのか楽しみである。

武芸者になったからには必ず何かと戦うことになるだろうし、それを悪く思っていない。むしろ前世の退屈な記憶を持っているためか楽しみなくらいだ。

だから共に戦場を駆けることになる武器は妥協しない。

自分専用の、最適な錬金鋼にしてみらおう。

そんなことを考えながら私は案内された部屋に入っていった。

#### 第4話（後書き）

フィアの剽量は二ーナと同じくらい。

でもグフカスみたいにガトリング撃ちまくらせたい。  
なんとかしよう。

感想待ってます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5349z/>

---

ガンオタ少女のレギオス転生(仮)

2012年1月6日01時47分発行